

Title	「ロード・ジム」：コンラッド研究(II)
Sub Title	A study of Conrad (II) : Lord Jim
Author	上村, 達雄(Kamimura, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.26, (1968. 11) ,p.21- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00260001-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「ロード・ジム」

コンラッド研究(Ⅱ)

上 村 達 雄

Lord Jim (1900) が *Joseph Conrad* (1857—1924) の数多い作品の中でも、五本の指に屈せられる傑作であることは間違いない。船乗りとしての功名心に燃え、めざましい手柄を立てることを夢に見ている若い航海士 Jim が、船の遭難に度を失って、義務を尽さず船を見捨てたために、裁判にかけられ、資格を剝奪されて南海の蠻地に姿をくらまし、そこでほとんど唯一の白人として住民の信望を集め、彼らの守護神の役を演ずる輝かしい年月を経験したあと、運命の逆転にあって自殺も同様の死に方をして果てるという、一見冒険談ふうの筋立からは想像もつかないほどの、激しい精神的緊張が全篇をつらぬいている。こゝには人間の夢と現実の相剋という永遠の主題が、数々の副人物を支柱として堅固な小宇宙をなすまでに描き出されているのである。しかも主題そのものの緊張に加えて、船長 Marlow を主な語り手とするそのナレーションの運びが、*The Heart of Darkness* の場合よりさらに錯綜し、いたるところに時間の逆転や、副次的話題への脱線がみられ、それが一見作者の恣意に発しているかのような印象を与えながら、じつは綿密な計画に基づいていることが読み進んでゆく内に納得されるので、読者は一瞬も気を抜くことがゆるされない⁽¹⁾。しかもこれだけの長篇でありながら、読

者には作者が寡黙でありすぎたという恨みが残るのである。ことに主人公 Jim の問題を際立たせるために配置された幾人かの重要な副人物の取扱いにおいて、寡黙と省略はいちじるしく、その欠けたところを想像によって補うか、さもなければその寡黙を作者の限界として割切るか、いずれかの選択をしなければならぬ。たとえば一篇の中で、Marlow から Jim の裁判と放浪までのいきさつを聞かされた貿易商で、蝶の蒐集家でもある Stein が Jim を評して、「その男はロマンチックだ、ロマンチックだ。……そしてそれは非常に困ったことだ——非常に困ったことだ……非常にいいことでもあるが。」と云うとき、この困ったことといふことの矛盾の不可解な併置を、ある評者は Conrad 自身が陥入った危険を示し、Conrad がそこ以上には到達できない工夫の限界点を示していると考ええるのに反して、別の評者はその真意をこう解している。「それ(ロマンチックであること)は重荷であるが、それはまた人が己れを知り他人のために生きることを知る手がかりでもある。だから Jim に彼のロマンチックな理想を実現するための機会を与えてやらねばならぬ。」と。

また Jim が船長らとともに見捨てて逃した難破船 *Pama* 号(——彼らはそれが沈んだとばかり思っていたが、800人のメッカ巡礼の回教徒をのせたその船は船首へ深く傾いただけで沈まなかった——)を救って近くの港へ曳航したフランス砲艦の士官は、Jim の行為を批評するのにもっとも強力な足場をもっており、また事実その批評は Marlow や Stein の Jim 批評とはちがった深味をもっているが、その士官が誰でも人には恐怖のあまり一切をなげうってしまう時があると語り出して「単なる頭痛や腹下しだつて、ゆうに……たとえば私にしても——私も試験済みです。 *En bien!* いまこうして口をきいている私にしてからが、あるとき……」(p. 114)と途切れ勝ちの自己表白を、尻切れとんぼに終らせており、そのほか多くの人のセリフが同巧異曲で云いかけたことを途中でのんでしまっている。これは何か作者の本質的なところにつながっているあるためらいなのか。

さらに従来あまり人々の注意を惹いていない構成上の破綻を一つ指摘しておかなければならない。それは第5章以後第37章まで、つまり全体の8割近くを Marlow の直接の体験でみたし、(第4章までは客観描写であるが)すべてが Marlow の見たこと聞いたこととして描かれているが、Marlow が Malay での Jim の最後の日々⁽¹⁾に立会えない人間であるところから、第38章以後終末までを Jim と

起居を共にした側近の男女（あからさまにそうは云っていないが、恐らく）と、Jim を死に追いやった一番の原因である海賊 Brown の話に基づいて、Marlow がものした手記という形で表現している。その限りでは決して破綻ではないが、問題はその手記の中にしばしば超個人的な、全能的な視点がはいり込み、手記の純粹性をそこなっていることにある。つまり、いまあげた3名の視界には決して入ってこないし、想像も出来ないような、また Marlow が補足したにしてはその出所が全く不明な情報が随所に点在する。

たとえば飢えた海賊 Brown の一味が、オランダ自治領の Patsuman に食糧と水を求めて侵入したとき、たまたま Jim が不在であったために、Patsuman は混乱状態を呈し、Jim の人気と実力に嫉妬を抱いていた反対派の酋長 Alang の手先 Kasim が、自派の權威をこの際恢復しようともくろんで、むしろ Brown と手を結んで Jim 側を滅ぼそうと策をめぐらせるその胸の内を、手記は神の眼を以て記述している。(p. 267—8) 明らかにその Kasim が Jim 側の実力者の御曹司 Dain Waris に事の次第を通報して、陰險な二重取引を計ったことは、生残った者の誰にも知られていない事実であるはずだ。つまり本来聞き書きの手記の中には入り得ない、次元の違った視点が次々と入りこみ、そのくせときおり、念を押すように、語り手 Brown の語りの現場がもっともらしく挿入され、手記の純粹性を思い出させようとしていることが、かえって苦しい感じを与える。多くの批評家、とりわけこの作品を Conrad の最高の作品であるとして委曲を尽して論じている A. J. Guerard が、印象主義的なきわめて効果的な手法として賞賛しているこの Marlow を媒介とする説話の方法が、最後のところで、やむなく破綻をきたしていることは、もともと一人称で語り尽すには無理な素材であったと云うより仕方がない。

さて Jim はイギリスの片田舎の善良な牧師の子に生れ、すぐれた体格と鋭い感受性にめぐまれ、また人一倍功名心が強く、何かの危険に遭遇したら身を犠牲にして人を助け、英雄になろうという夢を抱いている。この夢が彼の短い生涯を貫く理想であるのに、現実の彼は切迫した危険にさらされるたびに、人を助けるよりもまず己れの身をかはってしまうのである。——商船学校の生徒であったときに、同僚たちが進んで嵐の中を他船の救助におもむいたのに、彼はつい尻込みしてしまった。(p. 11—12) しかも Jim は己れの怯懦を恥じるよりも、むしろ次回にもっとひどい嵐が来て、同僚がみなひるんでしまふであろうときに、自分ひとりで嵐に挑戦してみせる

とりきむのである。

その機会は、彼が一等航海士となって *Patna* 号に乗り組んだときに、思いもかけない訪れ方をした。*Patna* 号は 800 人の回教徒をのせて、*Aden* をめざしてアラビア海を平穩に西へ向っていた。深夜、船は突如船首に激しい衝撃を受け、その衝撃は次第に船尾の方へと移って行くようだった。恐らく洋上に遺棄されている廢船の一つにぶつかつたのであろうが、船首の方から浸水が始まり、船はみる／＼そちらへ傾いて行つた。沈没は必至と思われた。船長をはじめ主な船員は先を争つて救命ボートに乗り移つた。800 人の回教徒を收容するのに 7 隻のボートでは、しよせん無理だつたから、回教徒たちが事件を知らないらしいのを幸い⁽⁵⁾船をすてたのである。Jim は最後までふみとどまつた。作者はこれを「his passive heroism (p. 83) と表現している。Jim はようやく事の真相に気づきはじめて回教徒たちの救いを求める叫びを聞き、またボートからは「跳べ！跳べ！」という誘いの声を聞いた。そしてわれにもあらず後の方の聲に従つて、またもやわが身をかはつたのである。しかし *Patna* 号は沈まずに、仏砲艦に救われたことをやがて耳にしたとき、Jim はわずか一瞬の判断の狂いのために、ふたたび己れの夢を達成しそこなつたことを知るのである。奇妙なことに Jim には、船乗りとしての行動規準にそむいた事から来る良心の呵責よりも、せつかくの英雄になれるチャンスを逸したという無念の想いが優越しているのである。

船乗りとしては死を賭してまで船を守ることが名譽であり、そういう者こそ英雄なのだという Jim には欠けている觀念が、先に述べた仏砲艦の士官の言葉によつて、(p. 115) また後述する *Brierly* の行動によつて、ちやうど *Patna* 号で終始黙々と舵をにぎつて、決して己が部署を去らなかつた二人のマレー人の舵手の存在によつて、(p. 78) 雄弁に語られており、Jim の存在はそういうものからの照り返しによつて、いっそう鮮明に全貌がうき上つて来るのである。

しかしもちろん Jim に良心の呵責が無かつたわけではなから。蠻地 *Patusan* での活動がことごとく凶にあたつて、マレーの一部落全体を事実上支配下に収めたその成功ぶりを、現地を訪れた *Marlow* に得意げに見せてまわつたあげく、別れに際して去りゆく *Marlow* に向つて、「みんなに云つて下さらう……」と云うかけて、ふと口をつぐみ、「いや、何も云うことはありません。」と思ひ返したその胸

の内は、(p. 252) いまの成功もますますおぶりも決してあのときの汚点をつぐなうに足るものでないことを、外の世界の規準に立つて判断したからに外ならない。そしておそらく、この夕陽の海辺での二人の別れの場面こそ、Jim の悲劇をもっとも鋭く表現したものであり、これまでの文学に描かれた別離の光景の中でも、際立ったものの一つと云ってさしつかえないであらう。

また、海賊 Brown とその一味が部落に侵入して来たとき、Jim が愛人 Jewel や腹心の部下 Tandy Khan のすゝめにもかんわず、彼らと武力で対決することを避けて、彼らを穏便に海へと去らせようとしたのは、Brown が Jim に向かって投げた言葉によって、Brown と自分との本質的な血のつながりを、過去における似かよった経験を、忌むしい罪の存在を、——要するに二人が理智も感情も同じきつなで結ばれた存在であることを思い知らされたからであつた。(p. 291) 極悪人 Brown を裁く資格が自分にないことを Jim は知つたがゆえに、全部落の信望を裏切れることは百も承知で、妥協の途を選んだのである。“He is one of us.” という言葉によって表現される連帯意識——じつはこの作品に登場する主要な白人は、すべてこの言葉の適用を受けているといつてさしつかえない——がこゝにも働いており、作者 Conrad が、コンゴ—通航の体験から得た人間認識の核心が、この作品の基底に縦横に網の目をひろげていてその一端がこゝに現れているのである。ところで命拾ひをした Brown は Jim の信賴を裏切つて、海への出口に待っていた実力者の御曹司 Dain Waris の一行を、行きがけの駄賃に殺して逃げる。その Dain の父であり、Jim にとっては恩人である老 Doramin の前に、Jim は死を覚悟で姿をあらわし、Doramin のゴストルによって果てるのである。しかも Jim は倒れる前に、並みいる部落民たちの顔を、「誇らしげな、毅然たるまなざし」“a proud and unflinching glance.” で見やうたとある。(p. 312) Jim はやはり功名心に燃えた、英雄気どりの Jim であつたことが、この二つの形容詞で意味されていると云つてよい。なぜなら、この作品の開巻 3 ページ目に、彼が少年のころ自分の将来を夢見たくだりで、自分を「いつも義務に身を捧げる手本として、また物語に出てくる英雄のように毅然とした」“always an example of devotion to duty, and as unflinching as a hero in a book.” 存在として思い描いていたとある。だからいま、倒れる寸前に Jim がまわりに見た顔々は、マレー人のそれではなくて、家郷の人々、またいまで彼の挫折だけを見てきたすべての人々、とりわけ Marlow や Stein の顔であつたらう。これらの顔の前で彼はついに念願を果して、毅然たる英雄となつて

死んだのだ。まことに「ロマンチック」な男ではあった。

ところでいくつか問題が残っている。その一つは作者 Conrad が Jim という人間を結局どう評価していたかという問題である。Marlow の視点は決して全面的に Conrad を代弁するものでないことは誰の眼にも明らかであって、Marlow は Jim と深くかゝわり合つてゆくうちに、よく描かれた作中人物がすべてそうであるように、作者と離れてひとり歩きを始めていくのである。Jim のような若者を相手にしていたらば誰でもそうなるであらうように、Marlow も Jim の優れた数々の資質と人間味に惹かれ、その不幸を共になげき始める。そこに Stein という強烈な個性があらわれて、Jim を前述のようにロマンチックであると断定する。それならばどうしたらいいのか、療法は何かという問いに Stein は答えて——海に溺れたもののように夢に溺れているのだから、その破壊的な力に身をゆだねて手足を水の中で動かして、深い海が体を押し上げてくれるのを待つことだと云い、(p. 163)「破壊的な力に身を没して……夢を追い、また夢を追いつ、そういうふうにして永遠に——終りまで……」(p. 164)と云うでもまた、暗示的な尻切れとんぼで口をつぐむのである。Stein はある程度 Conrad 自身の Jim 批評を代弁していると考えられるが、その Stein がまた貿易商として巨富をなしたにもかゝらず、そうした地上の成功にあき足らずに、蝶を追つて南海を放浪して歩く夢見る人であり、“He is one of us” なのである。従つて彼の Jim 批判も決して高所から大上段にふりかぶつて切るといふような、超越的なものではあり得ず、むしろ夢に徹することの中に救いがあるという、Jim のこれまでの行路に沿つた内在的なものになっている。そして Stein の処方に従つて、永遠に夢を追つことで救われようと、Patusan へ落ちのびた Jim が早い死を迎えねばならなかつたといふことの中に、われわれは現実に対する作者のペシステイックな眼を見るべきなのであろうか。

Jim を見る視角の中に忘れてならないもう一つの存在として、Captain Briery がある。Captain Briery は Marlow と同じ立場で海難審判の法廷に陪席判事として出席し、Jim の事件を知るのであるが、彼自身は「生涯に一つの過誤を犯したこともなく、一つの事故一つの災難にも遭わず、着実な出世を阻まれたこともなかつた。そして優柔不断も、まして自己不信も経験したことのない幸運な男であるように見えた。」(p. 48)つまり過誤を犯し続けた Jim とは正反對の、俯仰天地に恥じざる海の男であつた。その彼が Jim の裁判

に立ち会うや、異常な嫌悪と不安を示して、このような裁判は船員全体に対する不信をかき立てる結果になるから、せむ Jim を逃してやっつてしまえと、Marlow に向つて逃亡資金として 200 ポンドをきつづけるのであつた。⁽⁵⁰⁾しかし結局判決は行われ、Brierty はふたび自分の船に乗って航海に出るが、わずか数日後に投身自殺をして果てるのである。このことの異常さについて、筆者は 6 名の批評家の解釈を参照したが、⁽⁵¹⁾Marlow 自身の口から述べられる憶測以上にはあまり出ていないように思われた。ただ A. J. Guerdan が 1880 年に実際にあつた事件として、Cutty Sark 号の船長の投身自殺——自分の船で起つた殺人事件の犯人である航海士をかばつて逃亡させたことを苦にして入水自殺した——の件を紹介しているのが特に目立っていた。(ibid., p. 27—8) しかしこの Sark 号の船長の場合自殺の理由はまだよほど分明である。これにくらべて、「一つの過誤も犯したことのない」Brierty が、なぜ他人の恥を恥として死なねばならなかつたか。「彼はおそらく自分自身の件を無言の内に審理していたのであろう。そして評決は断固有罪と出たにちがいない。」(p. 50) と Marlow は云う。また諸家の解釈もほぼこの線に沿つており、Brierty ははじめて自己をのぞき込んで、そこに Jim と同じものを発見したのだとしている。こゝにも “He is one of us.” の認識が鮮明に働いていることは事実である。そして可能性としてではあつても、船長としての行動規準にそむくような傾向が自分の内にあつたことを恥じて、死を選んだのだとしたら、それは Jim に対する痛切な批判ともなるはずである。しかしそれほど鋭い内省をもつた Brierty がなぜ被告を逃亡させようと計つたのか。Jim にどのような判決が下されようと、良心の眼には Jim と己れの有罪は明らかであつたはずである。いったんは船員全体の名譽のために、ほとんど衝動的に被告を逃そうと試みたものの、右のことに思い及んでは自己嫌悪に陥らざるを得まい。しかしこれらのことから直ちに、無雑作に、一人の幸福な人物に死を選ばせている Conrad の作家的決断は、まことにすさまじく、ショッキングである。それだけに解釈の余地を多く残して、謎めいた余韻が生じるのである。

さて、“He is one of us.” の網の目が主な登場人物のすべてを覆っていることは明らかになつたが、白人以外の登場人物はその被覆の外に置かれていることを注意しなければならない。恐らく混血の Jewel をはじめ、Patusan での対立する二陣営の現住民のすべてが、本質的には Jim らの理解の及ばない存在として、別の世界にあり、また Patna 号での回教徒の群集の描き方もその線に沿つて

いる。Patna 号で持場を離れずに職責を果たし、裁判にも証人として登場する二人のマレー人の舵手も、白人たちの内面に渦巻く虚栄や不安や怯懦を分け持たない異質の存在として描かれている。白人がすべて「人間的」であるとするれば、こゝでの有色人種はすべて「非人間的」である。この作品だけ読むものは、これを Conrad の限界と見なすかも知れないが、ほぼ同じ時期の Conrad の諸作品に描かれた多くの黒人や黄色人種に対する作者の眼の深さ、真剣さを知るものは、⁽⁸⁾Conrad がこの作ではむしろ意識的に視界を限って、その分だけ主題を鮮明にさせていることを知るはずである。

註1 Conrad がいかにこの作品を書くことに全身全霊を打ち込んだかは、一九〇二年一月七日附の次の書簡からも明らかである。

「……私の健康はこのところたゞへん安定してよろしいのです。——*Lord Jim* を書いていた一〇カ月はどほ、私はいつも死にそんな感じがしていましたが。……恐らく真の文学は（それに、とりつかれ、たゞ）骨や髓や関節にひびく病気みたいなものなのでしょう。」

Letters To W. Blackwood etc., ed. W. Blackburn, Duke Univ. 1958, p. 137

2 *Lord Jim*, Penguin Modern Classics, p. 165 以下のページ数はすべて同書のものを示す。

3 Neville H. Newhouse, *Joseph Conrad*, Evans Brothers Ltd., London, 1966, p. 80

4 Jocelyn Baines, *Joseph Conrad*, Lowe & Brydone Ltd., London, 1960, p. 249

5 いかに深夜とは云え、八〇名もの人間が船の衝撃を全く知らずに眠り続け、かなり時が経って船員たちがあわただしい動きを示すようになってから、ようやく回教徒たちに不穏な様子が見え始めたところのは、現実離れがすすぎてまいいか。描写の分散を避けて主要人物に焦点を合せておくためには、回教徒たちを眠らせて置く必要があったのかも知れないが、この部分が作品の弱点となっている事は覆うべくもない。げんに *Jerry Allen* 氏 *The Sea Years of Joseph Conrad*, Doubleday & Company, INC., New York 1965 におき、Patna 号の事件のモデルとなつた一八八〇年夏の Jeddah 号の史実を綿密に考証しているが、似通つた状況のもとに船を見棄てて逃げようとした船長以下の乗つた救命ボートを、この場合は総勢九九二名の巡礼団の多くのが転覆させようとして、箱や、つばや、なべや、その他持てるものは何でもそのボートめがけて投げつけたところとである。(p. 132) これこそ現実ところの事である。

6 Briefly かこの前後に云つたと思われる言葉——「やう (Jim) を地下深くへもぐらせて置け。」——は、その後しばしば Marlow の想念にうかぶ Stein にも取次かれ、Stein に密地 Patusan を思ひ出ゆゆりあひかけつたのである。(p. 154, 167)

7 J. Baines, *ibid.*, p. 246—8

- A. J. Guerd, *ibid.*, p. 28, 148—9
- Frederick R. Karl, *Joseph Conrad, The Noonday Press*, New York, 1960, p. 124
- Walter F. Wright, *Romance and Tragedy in Joseph Conrad*, Russell & Russell, New York, 1966, p. 111, 119—20
- Leo Gurko, *Joseph Conrad: Giant in Exile*, Macmillan, New York, 1962, p. 109, 113
- Eloise K. Hay, *The Political Novels of Joseph Conrad*, The Univ of Chicago Press, Chicago and London, 1963, p. 67
- この内最初の五名は、Biederly が Jim の中に可能性としての自己を見て、その恥辱のために死を選んだのだと考える点で一致しているが、ひとり E. Hay のみは、Biederly は、自分に似たような男 Jim が船員の行動規準を破ってまで、力強く生きて行くことができるのを見て、自分のその規準に対する理解がニセものであることを知り心の支えを失って死を選んだのだと考える。
- 8 Almayor's *Folly* (1895) における混血娘 Nina や白人 Dan やその他。The *Nigger of the "Narcissus"* (1897) の黒人 Walter Wait。Heart of *Darkness* (1899) における黒人船手に対する Marlow の深い共感——。